

大学生における発達障害についての 理解とイメージ

——教育心理学の授業を分析対象とした検討——

都 筑 学

はじめに

今日、我が国においては、18歳人口の50%以上が大学進学をする高等教育のユニバーサル化の時代を迎えている。そのような状況のもとで、多様な学生が大学に進学するようになってきている。日本学生支援機構は、毎年、大学・短期大学及び高等専門学校を対象に、「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」を実施している。2019年度（5月1日現在）の調査によれば、全国の高等教育機関に在籍している障害学生数は37,647人であり、全学生数3,214,814人の1.17%となっている。そのうち、発達障害は7,065人であり、障害学生に占める割合は18.8%となっている。こうした状況において、大学生が人間の発達やその個人差、および多様性についての理解を深めることは重要であり、心理学が果たすべき役割は大きい。

本論文は、上記のような問題意識のもとに、筆者が中央大学で担当した教育心理学の授業（2019年度前期）において、発達障害について講義した回の授業を分析の対象として、受講を通じた大学生の発達障害に対する理解とイメージについて検討したものである。

授業の構成

教育心理学は、中央大学文学部のカリキュラムにおいて心理学専攻の2年次配当の選択必修科目となっている。他専攻・他学部の学生が履修可能なゴシック科目としても指定されている。

筆者は、発達心理学（2年次配当選択必修科目・ゴシック科目）も担当しているので、教育心理学の授業では、教育心理学の4領域（発達・学習・人格・評価）のうち、発達を除いた他の3領域を講義した。以下に、全講義のタイトルを示しておく。

第1回 教育心理学の4領域（ガイダンス）

第2回 学習の基礎過程

第3回 学習の理論

第4回 学習の動機づけ

第5回 学習の指導・教授方法

第6回 学習の個人差

第7回 測定と評価

第8回 学力と能力

第9回 学級集団

第10回 学校適応

第11回 問題行動

第12回 発達障害

第13回 テスト

授業の進め方

毎回の授業では、LMS（learning management system）の一つであるmanaba¹⁾上にパワーポイント資料をpdfファイルとして事前配布し、その

資料のスライドをプロジェクタに投影しながら講義を進める形式をとった。発達障害の講義の際に用いられた資料は、付録に示してある。

また授業中には、respon²⁾を利用して、事前に用意しておいた質問に対して、授業中に受講生がスマートフォンやパソコンを用いて回答することを求めた。回答を集約した結果は、図や表として即時に集約されるので、それをパソコン画面からプロジェクタで投影してフィードバックしながら授業を進めていった。

授業の受講者

表1に受講生の人数を示しておいた。専攻別では65人(74.0%)が心理学専攻の学生であり、学年では、2年生が35人(40.0%)、3年生42人(47.7%)を占めていることが分かる。このような専攻や学年の人数分布から、発達障害について他の授業等で聞いたことがあるという学生が、一定程度含まれていると考えられる。

表1 受講生の専攻と学年(人)

専攻 \ 学年	2年	3年	4年	合計
心理学	31	30	4	65
教育学	2	6	4	12
その他	2	6	3	11
合計	35	42	11	88

授業の事前学習と学びたいこと(スライド番号2, respon1)

毎回の授業の最初に、事前学習の状況や今日の授業で学びたいことをrespon(スライド番号2)で回答してもらうようにしている。その結果は、プロジェクタで受講生に対して提示し、情報を共有しながら授業を進めて

いる。

その教育的な意図は、次の2点である。第1は、学生が、授業前にどれぐらい予習しているか把握するとともに、学生自身が受講生全体の事前学習の程度を認識することである。自分よりも積極的に事前学習している人があることを知れば、そうした情報が学習への動機づけを高めるかもしれないと考えられる。第2は、授業の開始前に、自分の学習目標を表現することによって、授業中の学習への能動的な姿勢を促すことであった。それに加えて、筆者が学生の回答にざっと目を通し、学生の興味や関心がどこにあり、具体的な疑問や質問があるかどうかを知るための手段でもある。

表2に示したように、事前学習に関しては、「manabaの資料をダウンロードして、ざっと目を通した」(10分未満)が81.8%と、大部分を占めていた。「資料に関連した情報を検索して、斜め読みした」(10～30分)と「資料に関連する論文や本を少し読んでみた」(30分以上)までを合わせると90.9%だった。他方で、「事前学習を全くしなかった」は6.8%だった。ほとんどの学生が、事前配布された授業資料を用意するという学習態度を身に付けたといえよう。ただし、全体としての予習の程度は、決して十分な水準までには達していないと考えられる。

表3には、授業を通じて学びたいこと、身に付けたいことの内容を分類

表2 授業の事前学習(人)

	度数	%
全くしなかった	6	6.8
10分未満	72	81.8
10～30分	7	8.0
30分以上	1	1.1
未回答	2	2.3
合計	88	100.0

表3 授業を通じて学びたいこと、身に付けたいこと

	度数	%
発達障害	62	70.5
障害	13	14.8
定型発達	5	5.7
テスト	3	3.4
その他	2	2.3
未記入	3	3.4
合計	88	100.0

した結果を示しておいた。発達障害、障害、定型発達の3つを合計すると、91.0%だった。「発達障害」に含まれていたものは、種類や定義、分類などを知りたいという一般的なものから、アスペルガー症候群、自閉症スペクトラム障害、カテゴリとスペクトラムなどの個別的なものまで、いろいろなものだった。「障害」に含まれていたものは、発達障害に限定されない障害全般に関して知りたいというものだった。「定型発達」には、ふつうの発達とは何か知りたいというものが含まれていた。次回にテストを控えた最終回の授業だったこともあり、テストについて知りたいという意見も出されていた。

授業の構成（スライド番号3）

授業は、3つの柱から構成されていた（スライド番号3）。第1セクション「定型発達」で、発達のとらえ方について紹介した後に、第2セクション「発達障害の定義」、第3セクション「発達障害の分類」が続くという流れである。

構成を示したスライドの下部に、障害者（disabled, differently-abled, disordered, challenged）という文字が記されている。これには、障害とい

う言葉には、多様な意味合いが含まれていることに気づいて欲しいということが意図されている。障害には、何かができない（disabled,）というだけでなく、多数派とは異なった形ではできる（differently-abled）という意味がある。さらには、調和や秩序、バランスが崩れている（disordered）という意味も含まれている。できないという状態から始まって、何かに向かって挑戦する（challenged）という意味もある。授業では、以上のようなことを話しながら、障害というものを多方面から考察していくことの大切さについて話し、授業に向けての準備を整えていったのである。

発達障害についてのイメージと知っていること（スライド番号 4, respon2)

授業の構成を話した後に、respon（スライド番号 4）を用いて、発達障害のイメージについて測定した。SD 法の尺度項目は、井上・小林（1985）の研究を参考にして、人格・社会・教育などの分野において使用頻度が高い上位 5 番目までの 5 つの形容詞対（明るい-暗い、やわらかい-かたい、暖かい-冷たい、積極的な-消極的な、強い-弱い）を用いた。評価は、7 件法であり、評価値の中間は 4 点である。

表 4 に示した結果から明らかなように、「弱い-強い」以外の 4 つの項目の平均値は、中間よりもネガティブな方向に位置していた。「かたい-やわらかい」と「消極的な-積極的な」では、「ややかたい」「やや消極的な」よりわずかに平均値は低かった。「冷たい-暖かい」では、「やや冷たい」よりわずかに平均値は高かった。「暗い-明るい」では、平均値は「やや暗い」と「どちらでもない」のほぼ中間にあった。「弱い-強い」では、平均値は「やや強い」に近い値だった。

他方で、標準偏差をみると、0.90 から 1.31 までとなっていた。標準偏差が比較的大きな値だったことから、学生間での発達障害のイメージに関

表4 授業前の発達障害のイメージ（平均値とSD）

	平均値	SD
暗い-明るい	3.46	0.95
かたい-やわらかい	2.89	0.98
冷たい-暖かい	3.11	0.90
消極的な-積極的な	2.90	1.17
弱い-強い	4.61	1.31

して、かなりの個人差が存在していることが伺われる。

respon（スライド番号4）に対する回答からは、学生が発達障害について知っていることには、次のようなものが含まれていることが分かった。第1は、「自分の意思を抑えたり、コントロールすることができなかったりする」「読み書きが苦手」「コミュニケーションをとるのが苦手」「学習のスピードが人よりも少し遅くなる」というような発達障害の行動的な特徴に関するものである。第2は、「脳の機能に何らかの問題が生じる事などが原因である」などのように、発達障害と脳機能との関係を述べたものである。第3は、「重度の人から軽度の人まで、かなり幅広い症状を含んでいる」「程度にかなりの個人差がある」「発達凸凹、スペクトラム的で多種多様な組み合わせ」「連続体のようなものであり、一人一人症状は違うため、一つの障害に当てはめるのは難しい」などというように、発達障害には多種多様なものが含まれ、スペクトラムとしてとらえられるものであることを述べたものである。第4は、「ASDとADHD、アスペルガー症候群」「自閉症、学習障害、注意欠陥多動性障害」というように、発達障害の分類・種類を挙げたものである。第5に、「目に見えない障害でも、普通に生活するにあたって不便を感じる人がいること」というように、発達障害が抱える社会的な問題を指摘したのもあった。受講生が知っている回答したものをまとめると、発達障害に関する全般的な知識・理解で

あった。しかし、個々の学生は、その一部分を知っているだけであり、そのような学生の認識の範囲を広げていくことは、重要な課題であるといえる。

定型発達とは何か（スライド番号 5・6）

授業では、ここまでの講義内容と学生の respon に対する回答をふまえながら、第1セクションである定型発達についての説明に移っていった。このセクションでの重要なポイントは、障害と定型発達について、正常と異常というような二分法でとらえてはいけないということである。学生のなかには、既に、この点に関して、スペクトラムとして連続的に把握することの重要性を認識している者もいた。他方で、「発達障害は先天的な病気である」というように、「ふつうの私たち」とは異なる存在だと考える学生もいた。

ここで大切なことは、障害があるかないかという○×で二分法的な考えではなく、定型発達と障害とが連続線上にあるととらえる考え方である。この二つの考え方を対比的に表現し、カテゴリーとスペクトラムという二つとして表したものが、図として示されている（スライド番号6）。講義のなかでは、この図を参照しながら、障害は私たちと無縁なものではなく、程度は異なっているが、私たちも共通した部分を持っているということを説明した。

障害者と接した経験（スライド番号 7, respon3）

障害のある子どもや青年・大人たちと直に接した経験（ボランティアなど各種の活動に参加したこと）があるかどうかについて、respon（スライド番号7）を用いて質問した。その結果を表5に示してある。52人（59.1%）の学生が、これまでに障害のある人たちと接した経験があると回答していた。その内容には、「友だちやその兄弟に障害のある人がいた」「小学生や

表5 障害者との接触経験

	度数	%
はい	52	59.1
いいえ	34	38.6
その他	2	2.3
合計	88	100.0

中学生のときに、「同じクラスにいた」という日常生活での経験や、「発達障害の子と遊ぶボランティアに参加した」「障害のあるスポーツ選手の方と一緒にスポーツをさせてもらう経験をした」「教職の介護等体験で昨年、支援学校に行った」「福祉施設で活動をともしした」というような経験が含まれていた。

障害のある人との接触経験と発達障害のイメージとの関係を検討するために、接触経験の有無別に発達障害のイメージの平均値を求めた。表6に示したように、接触経験がある学生の方が、接触経験のない学生よりも得点が低い傾向が見られたが、 t 検定の結果、いずれも有意差は見られなかった。「暗い-明るい」($t(84) = -0.20, n.s.$)、「かたい-やわらかい」($t(84) = -1.15, n.s.$)、「冷たい-暖かい」($t(84) = -0.26, n.s.$)、「消極的な-積極的な」($t(84) = -1.11, n.s.$)では有意差が認められたが、「弱い-強い」(t

表6 障害のある人との接触経験の有無による発達障害のイメージ

	接触経験あり		接触経験なし	
	平均	SD	平均	SD
暗い-明るい	3.48	1.02	3.44	0.86
かたい-やわらかい	2.85	1.06	3.09	0.87
冷たい-暖かい	3.13	0.99	3.18	0.80
消極的な-積極的な	2.83	1.20	3.12	1.17
弱い-強い	4.52	1.41	4.71	1.17

(84) = 0.68, *n.s.*) では有意差が見られなかった。

ふつうってなんだろう (スライド番号 8)

NHK が作成したアニメーション「ふつうってなんだろう」のなかから、[発達障害ってなんだろう] # 02 「ユウのふつう」(2分1秒) と [発達障害ってなんだろう] # 03 「サトシのふつう」(2分1秒) の2本を視聴した。発達障害のある子どもの生活や困りごとについて映像を通して知り、理解を深めるためであった。

発達障害の定義 (スライド番号 9～16, respon4・5)

障害や発達障害の定義を講義する前に, respon (スライド番号 9) を用いて, 障害者が利用できる施設であることを示す「国際シンボルマーク」を見たことがあるかを質問した。その結果は, 「見たことがある」が 55 人 (62.5%), 「見たことがない」が 33 人 (37.5%) だった。この後の障害の定義を記したスライドには, 国際シンボルマークを載せてある (スライド番号 10)。

障害の定義については, 最初に, 機能障害・能力障害・社会的不利の 3 つの側面から障害を理解することの重要性を概括的に説明し, その後, WHO の障害の定義を紹介した。

身体や脳の働きに由来する機能障害をその個人の特性としてとらえる個人モデルに対して, 社会モデルは機能障害に社会的障壁が加わることによって, 日常生活や社会生活における制限や不自由が生じるととらえる。障害のある人を取り巻く環境や諸制度, 社会的慣行や私たちの考え方など, さまざまなレベルで社会的障壁は作り出されている (スライド番号 12)。環境を整えるだけでなく, 私たち自身の意識を変えていくことも, 障害のある人が円滑な日常生活を送るためには重要だということを講義のなかで

話していった。

また、我が国が国連障害者権利条約に署名した 2006 年以降、障害者の生活や権利に関連する法律が制定・改正されていった。2016 年には、障害者差別解消法が施行され、大学においても、差別禁止や合理的配慮の提供が求められるようになった。このような障害をめぐる近年の社会的な動きについても紹介した（スライド番号 13）。

次に、発達障害の定義（スライド番号 14）と原因（スライド番号 15）を説明した。発達障害は、発達の凸凹が目立つことがあるが、そうしたことは私たちに也大なり小なり見られるものであり、定型発達と発達障害に関して、両者を共通性と連続性においてとらえることが大切だということを強調して話した。

社会的障壁ということを自分たちの生活空間において実感するために、中央大学に障害のある人にとって社会的障壁となるものが存在しているかどうか、respon（スライド番号 16）を用いて質問した。その結果、61 人（69.3 %）が、社会的障壁があると回答した。そのなかで、「階段が多い」「高低差が多い」という多摩丘陵に校舎が建てられたキャンパス特有の条件に関係したものが多く見られた。また、「色盲の人が苦手とする赤を注意喚起で使っている掲示物が多いと思う」「中央大学はダイバーシティ宣言をしているため、ある程度の障壁は乗り越えられるが、完全に障壁が無いとは言いきれない」などの意見もあった。

発達障害の分類（スライド番号 17～21）

発達障害は、狭義の発達障害と広義の発達障害に分かれる（スライド番号 17）ことを説明した後で、自閉スペクトラム症候群（ASD）、学習障害（LD）、注意欠陥・多動性障害（ADHD）について話した（スライド番号 19～21）。その際には、先に視聴した NHK の「ふつうってなんだ

ろう」のシーンにも言及し、できるだけ具体的に特徴を理解できるように努めた。また、アメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5（精神障害の診断と統計の手引き）についても説明した（スライド番号 18）。

発達障害のイメージと新しく知ったこと（スライド番号 22, respon6）

respon（スライド番号 22）を用いて、授業を聞いた後の発達障害のイメージについて測定した。表 7 に、授業前と授業後の発達障害のイメージの平均値を示しておいた。授業前後で平均値に差が見られるかどうか、 t 検定をおこなったところ、「暗い-明るい」（ $t(87) = -4.28, p < .01$ ）, 「かたいたい-やわらかい」（ $t(87) = -4.05, p < .01$ ）, 「冷たい-暖かい」（ $t(87) = -5.14, p < .01$ ）, 「消極的な-積極的な」（ $t(87) = -5.16, p < .01$ ）では有意差が認められたが、「弱い-強い」（ $t(87) = 1.78, n.s.$ ）は有意ではなかった。このことから、授業を受講したことで、学生の発達障害に対するイメージは肯定的な方向へ変化したといえるであろう。

授業を通して新しく知ったことには、知識の面から発達障害のとらえ方まで、多様な内容が挙げられていた。それらの回答を読むと、授業の受講を通じて、学生たちはそれぞれの興味や関心に引き付けて発達障害について理解を深めていったことが伺われる。ここで、そのなかから、いくつか

表 7 授業を通じた発達障害のイメージ（平均値と SD）

	授業開始前		授業開始後	
	平均値	SD	平均値	SD
暗い-明るい	3.46	0.95	4.03	0.81
かたいたい-やわらかい	2.89	0.98	3.52	1.08
冷たい-暖かい	3.11	0.90	3.85	1.01
消極的な-積極的な	2.90	1.17	3.72	0.92
弱い-強い	4.61	1.31	4.31	0.89

を紹介しておく。

- 中央大学に車いす用の自動車の駐車スペースが設けられたのは、実際にそういう人が出たからだと初めて知りました。最後まで授業を聞いて、障害はスペクトラムでとらえることがよく分かりました。
- 発達障害のとらえ方が昔とかなり変わってきたことを知りました。私が小学生の頃はもっと消極的なイメージだったものが、社会的にサポートしていくような流れになっていると思います。
- 発達障害の分類の詳細です。他の授業でも習うけれど、細かくは知ることができなかったので新しく知ることができてよかったです。
- 発達障害と一括りに障害と言っているが、それぞれの症状についてはありふれているものもあるのではないかと思った。発達障害の種類によっては、本人も周囲の人も気づいていないものもあるのではないかと感じた。
- WHO の障害の定義を初めて知った。
- 制度改正については新しく知ったことだった。
- 障害には様々な種類があるが、どれもその個人にとっては「普通」のことでありと捉えられていること。社会の平均的な価値観を押しつけてしまうと、その子の個性を失い二次的障害に繋がってしまう危険性があることを学んだ。
- これまでは漠然と、今の世の中では発達障害が受け入れられつつあるのではないかと思っていたが、まだまだ理解が進んでいないことがわかった。
- 障害のとらえ方の部分で、社会的障壁がその人の特性を“障害”とみなす要因の一つになるという点。他の方のレスポンスで、エレベーターの鏡の意味を知ることができた。

- DSM-5 という言葉を初めて知った。また、発達障害と聞くと普通の人とはちがうという認識があったが、寧ろ普通とは何かと疑問に思ったし、発達障害の人もみんなと同じ社会に生きていることを改めて考えさせられた。

授業の理解度，授業で学んだこと・不明な点（スライド番号 23・24，respon7）

授業の最後に、本日の授業のキーワード（スライド番号 23）を提示しながら、全体を簡単に振り返った後で、respon（スライド番号 24）を用いて、授業の理解度を 5 点満点で自己評価してもらった。その結果は、表 8 に示したとおりである。4 点以上が 72 人（81.9%）であり、授業の理解はおおむね良好だったと考えられる。

respon（スライド番号 24）の最後の質問は、今日の授業で一番印象に残ったこと・学んだこと、分からなかったこと・疑問に思ったことへの自由回答だった。学んだことに関しては、発達障害の種類・分類、スペクトラム、二次障害などが多く挙げられていた。授業のなかで視聴したアニメーション「ふつうってなんだろう」は、強い印象を与えたようである。ある

表 8 授業の理解度

	度数	%
0 点	0	0
1 点	0	0
2 点	3	3.4
3 点	12	13.6
4 点	40	45.5
5 点	32	36.4
未回答	1	1.1
合計	88	100.0

学生は、次のように述べている。「NHKのふつうってなんだろうという動画が印象に残りました。小さい頃にそのテレビを見ていたら、もっと早く障害について知れていたと思います」。100分という時間的制約があるなかで、授業の理解を深めるためには、ビデオなどの映像の視聴を効果的に挿入することが有意義だといえるだろう。

また、不明点や疑問点に関しては、次のような意見があった。

- 社会の障害に対する理解は進んでいるのでしょうか。
- 障害の「害」の字をこの授業では使っていましたが、教育心理学では「害」を使ってもいいのでしょうか？（ひらがなにするとか「碍」を使うとか）
- 発達凸凹は発達障害と同義で良いのでしょうか。
- 発達障害の人たちが生きていくために必要な支援は何か？ またどうしてまだまだ生きにくい社会なのか？

今回の授業は、最終回の講義であり、また次の授業はテストだったために、上で紹介したような意見に対して次回の授業中にコメントする機会はなかった。第2～12回の授業では、前週の授業の不明点や疑問点について、授業の冒頭で取り上げて、私なりの見解や説明を加えていた。このようなフィードバックは、学生が授業内容の理解を深め、教師と学生の相互交流を活発化するのに有益であるといえる。

おわりに

本論文は、発達障害を取り上げた授業を対象に、その授業を通じて、学生が発達障害に対する理解とイメージをどのように変化させたかを検討することを目的としていた。responを用いて学生から得た回答からは、学生

たちの発達障害に対する理解の深まりが伺われた。また、発達障害についてのイメージに関して、授業開始前と授業終了後において、有意な変化があることも明らかになった。ただし、実験前後のような厳密な実験計画とは違い、統制できない要因がいくつも存在している。100分の授業のなかには、さまざまな要因が相互に関係しあっている。

本論文は、LMSを利用した授業として、学生たちの意識の変化をさまざまな側面から示した実践記録でもある。授業資料とresponでの質問をあらかじめ準備し、授業内容を計画しておいても、当初の予定通りには運ばないことがある。実際の授業場面では、学生からの回答に対して、筆者が応答し、そこから新たな話が展開していくことがある。それが受講生にとって、授業理解を深めるきっかけとなったりもする。学生同士が、お互いのresponの回答を見ることで、新たな気づきを発見することもある。そうした多様な相互作用があったからこそ、学生たちの発達障害についての理解やイメージの変化が生み出されたのではないだろうか。


注


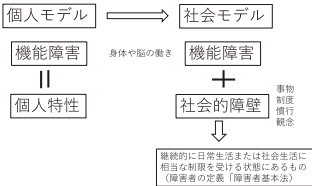
- 1) manaba クラウド型教育支援サービス (朝日ネット)
- 2) respon リアルタイム・アンケートシステム (朝日ネット)

文 献

井上正明・小林利宣 (1985) 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 33, 353-360 頁。

付 録

<p style="text-align: center;">教育心理学2019</p> <p style="text-align: center;">12.発達障害 2019.7.3</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p style="text-align: center;">respon 1</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、この授業の事前学習をどれぐらいやりましたか。 【全くしなかった】 【10分未満】 manabaの資料をダウンロードして、ざっと目を通した 【10～30分】 資料に関連した情報を検索して、斜め読みした 【30分以上】 資料に関連する論文や本を少し読んでみた あなたは、今日のこの授業を通じて何を学び、身に付けたいと思っていますか。 <p style="text-align: right;">2</p>
<p>12. 発達障害</p> <p>12.1 定型発達</p> <p>12.2 発達障害の定義</p> <p>12.3 発達障害の種類</p> <ul style="list-style-type: none"> 障害者 (disabled, differently-abled, disordered, challenged) <p style="text-align: right;">3</p>	<p style="text-align: center;">respon 2</p> <ul style="list-style-type: none"> 「発達障害」という言葉を聞いたとき、あなたはどのようなイメージが湧きますか、次の各対について、当てはまる所にチェックしてください。 <ul style="list-style-type: none"> とても かなり やや どちらでもない やや かなり とても 明るい・暗い やわらかい・かたい 暖かい・冷たい 積極的な・消極的な 強い・弱い あなたが、発達障害について知っていることを自由に書いてください。 <p style="text-align: right;">4</p>
<p>12.1 定型発達</p> <ul style="list-style-type: none"> 正常 (normal) と異常 (abnormal) <ul style="list-style-type: none"> ○か×かの二分法 定型発達 (typical development) <ul style="list-style-type: none"> 発達障害でない人々を意味する用語 どこまでが定型発達なのか？ 連続線上にあるものと見なす考え方 <p style="text-align: right;">5</p>	<p style="text-align: center;">障害の2つのとらえ方</p> <p style="text-align: center;">(1) カテゴリー</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 60px; height: 40px; background-color: white;"></div> <div style="background-color: black; width: 60px; height: 40px;"></div> </div> <p style="text-align: center;">(2) スペクトラム</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: right;">6</p>
<p style="text-align: center;">respon 3</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、これまでに障害のある子どもや青年・大人たちと直に接した経験 (ボランティアなど各種の活動に参加したこと) がありますか。 「はい」と答えた人は、具体的にどのような経験だったのか、その経験を通じてどのようなことを感じたのかを自由に書いてください。「はい」以外の回答の人は、あなたが障害のある人について感じていることを自由に書いてください。 <p style="text-align: right;">7</p>	<p style="text-align: center;">ふつうってなんだろう NHK</p> <ul style="list-style-type: none"> 【ふつうってなんだろう？#02】 ユウのふつう 【ふつうってなんだろう？#03】 サトシのふつう <p style="text-align: right;">8</p>

<h2>respon 4</h2> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、障害者が利用できる施設であることを示す「国際シンボルマーク」をどこかで見たことがありますか。 「はい」と答えた人は、どこで見かけたのかを書いてください。「はい」以外の回答の人は、このマークがどのような施設に付いていると思うか、あなたの考えを書いてください。 <p style="text-align: right;">9</p>	<h2>12.2 発達障害の定義</h2> <ul style="list-style-type: none"> 障害の定義（WHO：世界保健機構） <ul style="list-style-type: none"> 機能障害 能力障害 社会的不利 発達障害の定義  <p>障害者が利用できる施設であることを示す「国際シンボルマーク」</p> <p style="text-align: right;">10</p>										
<h2>WHOの障害の定義</h2> <ul style="list-style-type: none"> 障害とは、身体の損傷、活動の制約、参加の制限が含まれる包括的な用語である。損傷は身体における機能もしくは構造に対するものを指し、活動の制約は個人が仕事や行動を行う際に直面する困難を指し、参加の制限は個人が生活する中で体験する問題である。したがって、障害は複雑な現象であり、ある個人の肉体が持つ特徴と、その人が生きる社会の特徴とがもたらす相互作用の反映である。 <p style="text-align: right;">11</p>	<h2>障害のとらえ方の変化</h2>  <p style="text-align: right;">12</p>										
<h2>障害者に関する制度改正</h2> <table border="1"> <tr> <td>2006年</td> <td>国連障害者権利条約署名</td> </tr> <tr> <td>2011年</td> <td>障害者基本法改正 (定義の修正、差別の禁止など)</td> </tr> <tr> <td>2013年</td> <td>障害者差別解消法公布 障害者雇用促進法改正 国連障害者権利条約批准</td> </tr> <tr> <td>2015年</td> <td>対応指針策定（文科省、私立大学） 対応要領作成（文科省、国立大学）</td> </tr> <tr> <td>2016年4月</td> <td>障害者差別解消法施行 障害者雇用促進法の一部施行 (差別禁止、合理的配慮提供義務)</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">13</p>	2006年	国連障害者権利条約署名	2011年	障害者基本法改正 (定義の修正、差別の禁止など)	2013年	障害者差別解消法公布 障害者雇用促進法改正 国連障害者権利条約批准	2015年	対応指針策定（文科省、私立大学） 対応要領作成（文科省、国立大学）	2016年4月	障害者差別解消法施行 障害者雇用促進法の一部施行 (差別禁止、合理的配慮提供義務)	<h2>発達障害の定義</h2> <ul style="list-style-type: none"> 発達障害 <ul style="list-style-type: none"> 身体や、学習、言語、行動において一連の症状を持つ状態で、症状は発達中に発見され、通常は生涯にわたって持続する障害の総称 発達凸凹 <p style="text-align: right;">14</p>
2006年	国連障害者権利条約署名										
2011年	障害者基本法改正 (定義の修正、差別の禁止など)										
2013年	障害者差別解消法公布 障害者雇用促進法改正 国連障害者権利条約批准										
2015年	対応指針策定（文科省、私立大学） 対応要領作成（文科省、国立大学）										
2016年4月	障害者差別解消法施行 障害者雇用促進法の一部施行 (差別禁止、合理的配慮提供義務)										
<h2>発達障害の原因</h2> <ul style="list-style-type: none"> 原因は多岐にわたり、不明な点が多く残されている。 複数の要素が関係し、遺伝的、胎児期の保健状態、出生時の環境、感染症、環境要因などが挙げられる。 <p style="text-align: right;">15</p>	<h2>respon 5</h2> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、中央大学の中に、障害のある人にとって社会的障壁となるものが存在していると思いますか。 「はい」と答えた人は、その社会的障壁について具体的に書いてください。「はい」以外の回答の人は、なぜそう思ったのか、その理由を自由に書いてください。 <p style="text-align: right;">16</p>										

<p>12.3 発達障害の分類</p> <ul style="list-style-type: none"> • 狭義の発達障害 <ul style="list-style-type: none"> • 自閉スペクトラム症候群 • 学習障害 • 注意欠陥・多動性障害 • 協調運動の障害 • 言語の障害 • 広義の発達障害（以下を含む） <ul style="list-style-type: none"> • 知的障害 • 先天的な運動発達障害 • てんかん <p style="text-align: right;">17</p>	<p>DSM-5での変更点</p> <ul style="list-style-type: none"> • アメリカ精神医学会の診断基準DSM-5（精神障害の診断と統計の手引き：Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders） • メインカテゴリーで、神経発達障害（Neurodevelopmental Disorders）と総称する。 <p style="text-align: right;">18</p>
<p>自閉スペクトラム症候群 (ASD: autistic spectrum disorders)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 社会的なコミュニケーションや他の人とのやりとりが上手く出来ない、興味や活動が偏るといった特徴をもつ。 <ul style="list-style-type: none"> • 自閉スペクトラム症 • アスペルガー症候群 <p style="text-align: right;">19</p>	<p>学習障害 (LD: learning disability)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 一般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す • 読字障害（ディスレクシア） • 書字障害（ディスグラフィア） • 算数障害（ディスカリキュリア） <p style="text-align: right;">20</p>
<p>注意欠陥・多動性障害 (ADHD: attention-deficit hyperactivity disorder)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 多動性（過活動）や衝動性、また不注意を症状の特徴とする神経発達症もしくは行動障害 • 落ち着きのなさ • 些細な間違いの多さ <p style="text-align: right;">21</p>	<p>respon 6</p> <ul style="list-style-type: none"> • この授業の最初に聞いたことをもう一度尋ねます。「発達障害」という言葉を聞いたとき、あなたはどのようなイメージを思い浮かべますか、次の各対について、当てはまる所にチェックしてください。 <ul style="list-style-type: none"> • とても • かなり • やや • どちらでもない • やや • かなり • とても • この授業を通じて、あなたが発達障害について新しく知ったことがあれば自由に書いてください。 <p style="text-align: right;">22</p>
<p>本日のキーワード</p> <ul style="list-style-type: none"> • 発達障害 • 定型発達 • 機能障害 能力障害 社会的不利 • 発達凸凹 • 自閉スペクトラム症候群 • アスペルガー症候群 • 学習障害 • 注意欠陥・多動性障害 <p style="text-align: right;">23</p>	<p>respon 7</p> <ul style="list-style-type: none"> • あなたは、今日の授業をどれぐらい理解できたと思いますか。5点満点で自己評価してください。 • 今日の授業で一番印象に残ったこと、学んだことは何ですか。自由に書いてください。 • 今日の授業で分からなかったこと、疑問に残ったことは何ですか。自由に書いてください。 <p style="text-align: right;">24</p>